



「弱いときにこそ強い」

キリスト教センター ミカエル 加藤俊彦

この春、新しく入学された方々、また新学期を迎えた方々、一か月が過ぎ、新しい環境の中、皆さん心身に不調はないでしょうか？ 不安や戸惑いはないですか？ 悩んだり、迷ったりしていませんか？ 周りの人はどうでしょうか？ 連休が明けて、授業に出てこなくなった人、学校で見かけなくなった人はいませんか？

年齢を重ねるとなかなか弱音が吐けない、本音が言えない、正直になれないことがあります。子どもの頃は「お父さん大好き」「お母さんごめんなさい」など正直な思いが言えたのに、成長すると見栄(みえ)であったり、恥ずかしさであったり、あるいは配慮であったり、そのようなものを身にまとい、弱音が吐けなかったり本音が言えなかったりしがちになります。特に「辛い」「困った」「不安だ」「だめかも知れない」という弱さを感じても、それを吐露することが出来なかったりします。

新約聖書のコリントの信徒への手紙2の12章9節に「むしろ、大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです」というパウロが語った言葉が書かれています。「弱いときにこそ強い」という逆転の発想です。この言葉は、いったい何を言っているのでしょうか？



チャペル 礼拝堂

人生順調な時、心も体も元気な時、私たちは自分の力だけで生きていけると思ってしまう。ところが、うまくいかなくなると不安や心配事が出てくると、神仏に頼りがちになります。弱音を吐きそうな境遇になった時に初めて、神仏を受け入れる姿勢、神仏が入ってくる余地が私たちの心の中に出てきます。つまり、弱さを感じた時、神様を間近に感じる事が出来ます。この状況がパウロの言う「弱いときにこそ強さです。神様を受け入れることが出来る弱さのある状態が「強さ」です。

私たちは、元気な内は一人で歩くことが出来ます。ところが、骨折したり、捻挫したり、痛風になったり、歳を取ったりして、困難な状況に直面すると、歩くことが難しくなります。その時、杖や車いすなど、歩く上で頼りになるものがあると本当に助かります。そのように、私たちが人生という道を歩んでいく上で、日頃より神様という杖や車いすを持っていると、いざという時に頼りになると思います。

人生において「辛い」「困った」「不安だ」「だめかも知れない」という弱さを感じるような現実がなくなることはないにしても、神様という杖を持って、神様という車いすに乗って、そのような現実を歩めば、少なくともこけて大怪我をして立ち上がれなくなることはないのではないかと思います。

今は神様という杖も車いすも「いらない」「間に合ってます」という元気な状況かも知れません。ただ、弱音を吐きたい時、あるいはそのような人がいた時に、この話を思い出して頂けると幸いです。そして、その時チャペルを訪ねてみてください。それこそがキリスト教学校に通っている学生ならではの「特典」です。

ひとくちメモ 「キリスト教の記念日・祭り～聖霊降臨日(ペンテコステ)～」



キリスト教の祭りと言えばクリスマスや復活祭ですが、同じく大切な日が「聖霊降臨日」です。イエスの復活から50日目のこの日に、人びとが聖霊に満たされたとしています。聖書から「国際大学に相応しい」一節を紹介しましょう。

使徒言行録2:1 五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、「霊」が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しだした。